

# 「子供に笑顔戻したい」

## 琉大で精神医療学ぶ

ストヤコビッチさん

# AMDA沖縄 支部受け入れ

「コンピュータなどを  
使った先端医療を学びた  
い」と研修の意義を強調す  
る一方で、母国では、阪神

・淡路大震災でも社会問題  
になった被災者が心に痛手  
を受ける「心的外傷後スト  
レス障害」などで診療を要  
する子供たちが後を絶た  
ないといひ、まだ戦時下  
にある悲惨な状況を訴え  
る。

ストヤコビッチさんは  
「子供たちから笑顔が消え、  
かなりのうつ状態。大きな  
物音に過敏に反応してしま  
うなど、後遺症がひどい」と  
説明する。セルビア人が  
多く居住する共和国で、精  
神科を専門に手掛けるの  
は、ストヤコビッチさんが  
働く大学病院の診療所だ  
け。一日百人余りの患者を

一人で診るといひ、医師や  
カウンセラー不足がネック  
となっているようだ。

ストヤコビッチさんは十  
八日に沖縄入り。現在、研  
修しているのは、AMDA  
沖縄支部長の大仲良一医師  
が院長を務める沖縄セント  
ラル病院（那覇市与儀）。A  
MDAが旧ユーゴから研修  
医師を招いたのは初めて  
で、ストヤコビッチさんの

ほか、三人の医師が神奈川  
や岡山などで研修を積んで  
いる。ストヤコビッチさん  
は二十五日からは琉球大学  
医学部でカウンスリングや  
行動療法などを学ぶ。県内  
での滞在は来月二十一日ま  
で。

沖縄をはじめ国内の総合

病院ではそう珍しくないC  
Tスキャン（コンピュータ  
ー断層撮影装置）が、スト  
ヤコビッチさんの働く診療  
所を含む八十万人の医療圏  
域で一台しかないといひ、  
しかも「電気の配給がな  
く  
使えずじまい」といひ。

妻と子供二人を抱えるス  
トヤコビッチさんの月収  
は、紛争前の十三万円程度  
から現在では一万円ほどと  
極端に落ち込んだ。

医師はいても、難民らの  
治療に追われ学術的な研究  
の場がないのが悩みの種  
で、「日本の医療システム自  
体を学び取りたい」とAM  
DAの手弁当での研修受け  
入れに感謝している。